

## 日・英語における謝罪と感謝 ―背景心理からの分析―

大谷麻美（専修大学）

## 0. はじめに

ある場面においてどのような発話行為が選択されるのかは、異なる言語文化間で常に一樣というわけではない。日本語と英語においても、同じ場面に遭遇したとしても、そこで常に同じ発話行為が遂行されるとは限らない。話し手が聞き手<sup>注1</sup>より何らかの恩恵を受けた場合もその一例で、英語で感謝が行われる場面でも、日本語では感謝にかわり、あるいは感謝と共に謝罪が行われることがある。このような言語文化による発話行為の選択の違いは、時に異言語文化間での深刻な誤解を引き起こすこともあり得る。従って、その相違と、相違の背景にある各言語文化がもつ価値観を明らかにする事は重要な課題である。本稿では、話し手が聞き手より恩恵を受けた場面で、日本語と英語とでは発話行為の選択がどのように異なり、また、その違いが話し手のどのような場面認識や心理に起因しているのかを明らかにしようとする。

## 1. 先行研究と問題点

謝罪と感謝との関連については既に多くの先行研究があるが、その社会的要因および話し手の心理的要因に焦点を当てた日英対照研究として主なものは Coulmas(1981)、三宅(1993、1994a、1994b)がある。

Coulmas は、欧米文化圏ではそれぞれ別のものとして捉えられていた感謝と謝罪が、実はどちらも *indebtedness* という共通した心理に関連していることを指摘し、感謝と謝罪の選択のモデルを提示した。しかし、この研究はモデル提示にとどまり、個別言語での発話行為の選択基準に関してはほとんど言及されていない。

一方、三宅は、日本人とイギリス人の感謝と謝罪の使い分けをアンケート調査より分析した。その結果、日本人が「詫びの気持ち」を持ちやすい点、また、詫び表現を「詫びの気持ち」がなくても使用する傾向がある点を指摘した。しかし、この研究の問題点は「日本人の詫びの気持ち」とは何かがあいまいなままである点である。恩恵を受けた場面で日本人が謝罪を行う背景には、話し手のどのような状況判断や心理が存在するのか、又、それが英語における場合とどのように異なるのかは未だ明らかになっていない。

## 2. 本研究の目的

聞き手より恩恵を受けた場面に際し、日本語と英語とでは謝罪と感謝のどの発話行為が選択されるのか、また、その選択の背景にはどのような話し手の状況判断や心理的要因の相違があるのかを、談話完成テストと心理要因テストより明らかにする。そして両言語のこれら発話行為に含意される話し手の心理の相違点、共通点を探りたい。

## 3. 本研究における謝罪と感謝、およびその表現の定義

本稿では謝罪、感謝の定義を以下の山梨(1986)の適切性条件に基づくものとする。

#### 謝罪の適切性条件

命題内容条件：P（その発話に内包される命題内容）は x（話し手）による過去の行為

準備条件：x は自分の行為が y（聞き手）にマイナスであると信じている

誠実条件：x は自分の行為を悔いている

本質条件：x の自分の行為に対するその気持ちの表出

#### 感謝の適切性条件

命題内容条件：P は y による過去の行為

準備条件：x は y の行為が自分にプラスであると信じている

誠実条件：x は y の行為に恩を感じている

本質条件：y の行為に対する x のその気持ちの表出

また、具体的に何を謝罪表現、感謝表現と考えるかについては、熊取谷(1988、1994)を参考に上記の適切性条件を満たすもの、及び各発話行為の発語媒介意図を満たすものとする。

具体的には、謝罪表現としては、命題内容条件を満たすものとしては「遅くなりました」「お待たせしました」（熊取谷 1988）、準備条件を満たすものとしては「悪い」（本調査データより）、誠実条件を満たすものとしては「すまない」「申し訳ない」（本調査データより）、本質条件としては「深く反省しております」（熊取谷 1988）等も謝罪表現と考える。又、「許しをこう」という発語媒介意図を目的とした「許してください」「Excuse me.」（本調査データより）等も謝罪表現である。

又、感謝表現の場合は、その一例として、命題内容条件を満たす発話として「ごちー（「ご馳走になりました」の意）」（本調査データより）、準備条件を満たすものとしては「助かった」（本調査データより）、誠実条件としては「I owe you one.」（本調査データより）、本質条件としては「うれしー」（本調査データより）などが挙げられる。また「相手に肯定的評価をあたえる」という発語媒介意図を満たすものとして「That's kind of you.」「気がきくね」（本調査データより）なども感謝表現と考えた。

#### 4. 調査方法

本調査は2001年8月より11月にかけて行った。被調査者は、アメリカ人46名、日本人52名、計98名であった。アメリカでの調査地はミシガン、ハワイ、ヴァージニア、アリゾナであるが、被調査者の出身地は全米にわたるものであった。又、日本での調査は関西、関東で行ったが、こちらも被調査者の実際の出身地は全国にわたっていた。これら被調査者は全て社会人に限定した。これは、謝罪や感謝は社会的規範とかかわるところが大きいいため、社会的規範が確立していると思われる者を調査することが必要と考えたためである。また、海外在住経験のない者を対象とした。

調査方法としては、話し手が何らかの恩恵を受ける場面を設定し、その場面で被調査者が言うと思われる発話を記入させる談話完成テストと、その際の心理を5段階で判定させる心理要因テストを行った。<sup>注2</sup> (Appendix 参照)

場面設定のために、聞き手の地位（上司、同僚）、聞き手の負担（大、小）、話し手の責任（有、無）の3つを変数として、以下の8場面を設定した。

場面	地位	負担	責任	具体的場面
1	上	小	無	上司が気を利かせてコピーを取ってくれる
2	同	小	無	同僚が気を利かせてコピーを取ってくれる
3	上	小	有	上司に自動販売機のお金を借りる
4	同	小	有	同僚に自動販売機のお金を借りる
5	上	大	無	上司が行けなくなったコンサートの切符を無料で譲ってくれる
6	同	大	無	同僚が行けなくなったコンサートの切符を無料で譲ってくれる
7	上	大	有	上司に話し手の都合で残業を替わってもらう
8	同	大	有	同僚に話し手の都合で残業を替わってもらう

表1 場面設定

## 5. 分析結果

### 5-1 使用表現からの分析

まず、上記のそれぞれの場面で被調査者が言うであろう発話を記入させる談話完成テストを行った。その結果、各場面で出現した主な謝罪表現、感謝表現、さらにそれらの出現回数をまとめたものが以下の表2である。<sup>注3</sup>

場面	英語	日本語
1 (上司コピー)	Thank you. 48 You saved me a trip to the copier machine. 9 How thoughtful of you. 2 That was nice of you. 2	ありがとう 47 助かる 29
2 (同僚コピー)	Thank you.45 You saved me a trip to the copier machine. 8 How thoughtful of you. 4 That was nice of you. 3 Great. 2	ありがとう 52 助かる 17 気が利く 10
3 (上司自販機)	Thank you. 41 I appreciate it. 3 That's kind of you.2	ありがとう 30 すみません 30
4 (同僚自販機)	Thank you. 40 That's kind of you.2	ありがとう 31 サンキュー 7 ごめん 7 助かる 5 すみません 4

5 (上司チケット)	Thank you. 43 I appreciate it. 3	ありがとう 44 うれしい 8
6 (同僚チケット)	Thank you. 40 I appreciate it. 2 That was nice of you. 2	ありがとう 37 うれしい 10 わるい 7
7 (上司残業)	Thank you. 41 I appreciate it. 16 I'm sorry. 3 I owe you one. 2	ありがとう 26 申し訳ない 25 すみません 20
8 (同僚残業)	Thank you. 41 I owe you one. 16 I appreciate it. 10	ありがとう 32 助かる 23 ごめん 21 申し訳ない 6 悪い 6 恩にきる 5 すみません 4

表2 各場面での使用表現と出現回数<sup>注4</sup>

この表より、従来より指摘されているように、聞き手から恩恵を受ける場面では、英語ではほとんど全ての場面で感謝表現が使用されるのに対し、日本語では感謝表現とともに謝罪表現が多用されることが明らかである。

次に、各場面で、感謝と謝罪がどのように使い分けられているのかを見た。被調査者が各場面で感謝・謝罪のどちらの発話行為を選択したのか、あるいはそれらを併用したのかを分析し、その割合を下に示した。

場面	言語	謝罪	感謝	併用	なし	
1 (上司コピー)	英	0 (0)	100 (46)	0 (0)	0 (0)	感謝場面
	日	8 (4)	75 (39)	17 (9)	0 (0)	
2 (同僚コピー)	英	0 (0)	98 (45)	0 (0)	0 (0)	感謝場面
	日	0 (0)	98 (51)	0 (0)	2 (1)	感謝場面
3 (上司自販機)	英	0 (0)	89 (41)	0 (0)	11 (5)	感謝場面
	日	33 (17)	31 (16)	31 (16)	6 (3)	謝罪場面
4 (同僚自販機)	英	0 (0)	91 (42)	0 (0)	9 (4)	感謝場面
	日	15 (8)	65 (34)	13 (7)	4 (2)	
5 (上司チケット)	英	0 (0)	91 (42)	0 (0)	9 (4)	感謝場面
	日	0 (0)	75 (39)	6 (3)	19 (10)	感謝場面
6 (同僚チケット)	英	0 (0)	89 (41)	2 (1)	9 (4)	感謝場面
	日	8 (4)	67 (35)	6 (3)	19 (10)	感謝場面

7 (上司残業)	英	2 (1)	89 (41)	4 (2)	2 (1)	感謝場面
	日	40 (21)	21 (11)	38 (20)	0 (0)	謝罪場面
8 (同僚残業)	英	2 (1)	98 (45)	0 (0)	0 (0)	感謝場面
	日	17 (9)	40 (21)	40 (21)	2 (1)	謝罪場面

表3 場面別発話行為 % (括弧内 人数 英 n=46 日 n=52)

謝罪場面... 謝罪が50%以上の被調査者に使用される場面。

感謝場面... 謝罪が20パーセント以下の被調査者にしか使用されず、感謝表現が好まれる場面。

先の表2からもすでに明らかのように、聞き手から恩恵を受けるこれらの8場面では、英語で謝罪が行われることは非常にまれで、一貫して感謝が行われている。

それに対し、日本語では場面により謝罪と感謝が使い分け、または併用される。謝罪が高い割合で(併用場面を含めて5割以上の被調査者が謝罪)行われる場面(場面3, 7, 8)と、謝罪がほとんど行われず(併用場面を含めても2割以下)感謝が好んで使用される場面(場面2, 5, 6)とがあり、実際に選択される発話行為には場面ごとで明らかな差が見られる。

英語では聞き手から恩恵を受けた場面ではほぼ例外なく感謝が行われるのに対し、日本語では謝罪が行われる事は従来からすでに指摘済みであった。しかし、上記の表3の結果のように、日本語で場面によって謝罪と感謝が明らかに使い分けられている点を見ると、たとえ日本語とて、全ての恩恵場面で無条件に謝罪を行うわけではないことが明らかである。恩恵を受けた場面においても、「恩恵を受けたという事実」以外に、話し手の何らかの状況判断や心理的要因が感謝と謝罪の選択に影響を与えていると思われる。

## 5-2 心理要因からの分析

次に、上記8場面で、話し手がそれぞれの状況をどのように判断し、どのように感じるかを7つの心理について5段階尺度で判定させる心理要因テストを行った。心理要因としては、先行研究を参考に感謝と謝罪に大きく影響を与えると推測される、「迷惑/offensiveness」「恩恵/benefit」「負い目/indebtedness」「嬉しさ/happiness」「気の毒/sympathy」「責任/responsibility」「後悔/regret」<sup>注5</sup>を選択した。それぞれの場面で、被調査者全体の平均尺度が中間値3以上を示し比較的強く意識されたと判断される心理要因をその値順にそれぞれ場面ごとにまとめたものが以下の表4である。

場面	言語	相手	第一 心理要因	第二 心理要因	第三 心理要因	第四 心理要因	第五 心理要因	第六 心理要因	第七 心理要因
1 2 コピー	英	上	happiness (3.60)	benefit (3.53)	indebtedness (3.07)				
		同	happiness (3.72)	benefit (3.61)					
	日	上	嬉しさ (4.29)	恩恵 (3.77)					
		同	嬉しさ (4.42)	恩恵 (3.56)					
3 4 自販機	英	上	indebtedness (3.48)	responsibility (3.13)					
		同	indebtedness (3.28)						
	日	上	嬉しさ (3.38)						
		同	嬉しさ (3.52)						
5 6 チケット	英	上	happiness (4.04)	benefit (4.00)	indebtedness (3.93)	sympathy (3.44)			
		同	happiness (4.11)	benefit (4.11)	indebtedness (4.07)	sympathy (3.57)			
	日	上	嬉しさ (4.43)	気の毒 (4.40)	恩恵 (3.94)				
		同	嬉しさ (4.44)	気の毒 (4.25)	恩恵 (4.06)				
7 8 残業	英	上	indebtedness (4.36)	responsibility (3.69)	sympathy (3.40)	regret (3.36)	offensiveness (3.18)		
		同	indebtedness (4.42)	responsibility (3.69)	sympathy (3.58)	benefit (3.13)	regret (3.02)		
	日	上	責任 (4.58)	迷惑 (4.56)	負い目 (4.39)	後悔 (4.25)	気の毒 (4.08)	嬉しさ (3.17)	恩恵 (3.08)
		同	迷惑 (4.52)	責任 (4.45)	負い目 (4.33)	気の毒 (4.19)	後悔 (4.02)	嬉しさ (3.48)	恩恵 (3.15)

表4 各場面で強く意識された心理要因（平均尺度3以上）（ ）内は尺度平均値

まず、場面ごとに両言語話者の心理要因を見る。まず、聞き手の好意からコピーを取ってもらう場面1、2では、日・米で話し手が感じる心理とその順序に大きな違いは見られ

ない。ともに「嬉しさ/happiness」と「恩恵/benefit」が意識されている。ただ、日本語話者は「嬉しさ」をより強く意識している事がわかる。

財布を忘れて自動販売機で小銭を借りる場面3、4では、両言語では全く異なる心理が持たれている。日本語話者は「嬉しさ」を感じるのに対し、英語話者は聞き手に対する「indebtedness」と自分の失敗に対する「responsibility」を意識している。

チケットを譲ってもらう場面5、6では「嬉しさ/happiness」、「恩恵/benefit」、「気の毒/sympathy」が意識される点では両言語は類似している。しかし、非常に異なる点は、英語話者が「indebtedness」も強く感じている点である。日本語話者はこの場面での「負い目」意識は低かった（上司に対して2.75、同僚に対して2.50）。

残業を依頼する場面7、8では、意識される心理は両言語で類似しているが、ここでも英語では他の心理と比べて「indebtedness」がとりわけ強く感じられている。また、英語話者は聞き手に対する「offensiveness」をさほど強く意識しないのに対し、日本語話者は「迷惑」をとりわけ強く意識している点が大きく異なる。さらに、英語では「happiness」という心理は現れないのに対し、日本語では「嬉しさ」が感じられている。

これらの各場面での話し手の心理から明らかになる全体的傾向としては、まず、同じ場面に遭遇しても、日本語話者と英語話者とでは話し手が抱く心理がかなり異なるという点である。とりわけ英語話者がこれらの恩恵を受けた場面で「indebtedness」を感じやすい点は注目に値する。英語話者は8場面中7場面で聞き手に対する「indebtedness」を感じ、しかも場面3、4、7、8では「indebtedness」が他の心理よりも最も強く感じられている。日本語話者が「負い目」を感じたのは8場面中2場面（場面7、8）だけで、それとて最も強く感じられた心理ではない。従来の研究では、日本人の負い目意識の強さについてはたびたび指摘を受けてきたが(Benedict 1946 等)、本調査の結果はそれらの指摘とは異なるものとなった。

さらに、日・英語ともに、聞き手の地位は話し手の心理には大きく影響していない事が明らかになった。上司・同僚のあいだで心理要因の平均尺度に多少数値の差はあるものの、両者の間での差の最大値でも0.31で（場面7、8の日本語での「嬉しさ」。上司に対して3.17、同僚に対して3.48）、それ以外は大きな差が見られなかった。また心理要因の順序にも多少の前後はあるものの、上司、同僚どちらに対してもほぼ同じ心理状態を持つ事が明らかになった。

### 5-3 心理要因と発話行為の選択との関連

さらに、これら話し手の心理が、感謝・謝罪の発話行為の選択とどのように関連しているのかを見る。日本語での謝罪場面と感謝場面、又、英語の感謝場面とで、それぞれどのような心理が強く働いているのかを分析する。日本語で謝罪が使用される傾向が強い場面3、7、8（併用場面とあわせて5割以上の被調査者が謝罪）を謝罪場面とし、謝罪が行われず感謝が行われる場面2、5、6（謝罪を行った被調査者が併用場面とあわせても2割以下）を感謝場面とした。又英語は8場面全てが感謝場面であった。各場面での話し手の心理の平均値は以下のとおりである。

	迷惑	恩恵	負い目	嬉しさ	気の毒	責任	後悔
日本語謝罪場面	3.76	2.93	3.70	3.34	3.31	3.74	3.55
日本語感謝場面	1.54	3.85	2.34	4.43	3.42	1.63	1.35
	Offensiveness	Benefit	Indebtedness	Happiness	Sympathy	Responsibility	Regret
英語感謝場面	1.83	3.27	3.67	3.30	2.72	2.47	2.06

表5 各言語の謝罪場面、感謝場面ごとの心理尺度の平均値

この結果より、日本語の場合、謝罪場面と感謝場面とでは話し手の心理に大きな違いがあることが明らかになる。謝罪が高い割合で使用された場面では「迷惑」「負い目」「責任」が強く感じられている事がわかる。しかし、謝罪がされず感謝が行われる場面では、話し手の「嬉しさ」と「恩恵」の心理が強く感じられている。

一方、英語においては、感謝が行われる際、話し手は「indebtedness」「happiness」「benefit」を強く意識していることが明らかである。

## 6. 考察

### 6-1 感謝・謝罪と負い目/indebtedness

ある場面で、どのような発話行為を選択するかという問題は、話し手はその場面をどのように判断しどのような心理を抱くかという問題を抜きにして考えることはできない。先行研究では、恩恵を受けた場面で、日・英語間で選択される発話行為に相違が見られる理由について、日本語話者が聞き手の負担に着目するのに対し、英語話者が聞き手から受けた好意に着目し発話行為を選択するという、視点の違いが指摘されていた。(三宅 1994b)

本調査では実際に話し手の心理を問う事で、その真偽と両発話行為のさらに詳細な背景心理を明らかにしようとした。その結果、日本語で謝罪が行われる場面では、聞き手に対する「迷惑」の値が感謝が行われる場面よりも高く現れた(表5 謝罪場面 3.76、感謝場面 1.54)。また逆に、日本語の感謝場面では「嬉しさ」や「恩恵」の心理が謝罪場面より高く現れた(表5 感謝場面:「嬉しさ」4.43、「恩恵」3.85、謝罪場面:「嬉しさ」3.34 「恩恵」2.93)。一方で、英語では8場面すべてが感謝場面であり、聞き手の「offensiveness」に対する意識は低く(表5 1.83)、「benefit」「happiness」の値が高く現れた(表5 3.27、3.30)。その結果より、たとえ同じ場面に遭遇しても、日・英語話者間での「迷惑/offensiveness」と「恩恵/benefit」「嬉しさ/happiness」の感じ方には大いに違いがあり、それが謝罪と感謝の選択を分けると言え、本調査も三宅の先行研究の結果をほぼ裏付けるものとなった。

しかし、本調査の結果で、とりわけ注目すべき点は、「負い目/indebtedness」の心理の日米差である。「負い目/indebtedness」は感謝と謝罪に共通する心理であると考えられてきた。Coulmas(1981)によると、話し手が聞き手から何らかの the object of gratitude を受けた際には indebtedness を感じて感謝をし、一方、聞き手に the object of regret を与えた際にも indebtedness を感じ謝罪をすると説明している。このように感謝と謝罪はともに「負い目/indebtedness」という共通心理から起因している点で類似している。

しかし、実際に本調査の結果によると、この「負い目/indebtedness」の感じ方に日・米では大きな違いが見られた。日・米の感謝場面を比較すると、英語話者は「恩恵」を受けた



ことを意識し、それにともない「indebtedness」を強く感じている(表5 3.67)ことが明らかである。先の表4で、英語話者が、日本語話者が「負い目」を感じる以上に多くの場面で「indebtedness」を感じている点は既に指摘したとおりである。英語話者の場合、聞き手から恩恵を受けたと感じる場面で、「聞き手から恩恵を受ける」→「indebtednessを感じる」という一連の心理が見られることがわかる。その裏付けとして、英語話者が使用した感謝表現に“I owe you one.”が18例見られる(表2)。これは、話し手が聞き手に対し「負い目」があることを明示的に言語化した結果と考えられる。しかし、日本語話者が感謝表現を使用する場合は、表5から明らかなように「聞き手から恩恵を受ける」→「嬉しい」という心理の関連が読み取れるものの、これらの場面では「負い目」意識が非常に低いことがわかる(表5 2.34)。又、実際に、日本人の感謝表現にはその嬉しさを言語化した「うれしい」が18例見られた。しかし、英語の感謝表現に明示的に「嬉しさ」をあらわす感謝表現はひとつも見られなかった(表2)。一方、日本語の感謝表現で「負い目」をあらわす表現は「恩にきる」であるが、その出現も5例と英語の“I owe you one.”の18例に比べると格段に少なかった。

それらの点より、英語話者にとっての感謝とは、その背景に「聞き手から恩恵を受けて嬉しいが、一方でそのことで負い目を感じる」という心理があることが明らかである。それに対し、日本語話者が感謝を行う場合、「聞き手から恩恵を受けて嬉しい」という心理があるものの、「恩恵」を受けることにより「負い目」を感じる事は英語話者と比較すると少ないようである。これとは対照的に、謝罪場面で日本語話者が聞き手に対する「負い目」を強く感じていることを考えると、日本語では聞き手からの「恩恵」よりも、聞き手に対して「迷惑」をかけたと感じることが「負い目」になると思われる。その結果、たとえ実際には恩恵を受けていても感謝よりも謝罪が好んで選択されると考えられる。

## 6-2 謝罪・感謝と Politeness

Goffman(1971)は謝罪を remedial work のひとつと指摘し、又、森山(1992)も、聞き手と話し手の関係の不均衡を修復する言語行動という点で謝罪と感謝が類似していると述べている。このように、謝罪・感謝はともに人間関係を修復し維持するための言語行動と言う事ができ、当然、対人関係を維持するため言語方略である Politeness Strategies のひとつと考える事ができる。

現在もっとも普遍的な理論として広く受け入れられている Politeness 理論に Brown and Levinson(1987)の考え方がある。この理論では、人はみな誰も Face という基本的欲求を持つと考える。この Face には2種類あり、自分の領域を守りたい、立ち入れたくないという欲求の Negative Face と、人からよく思われたい、認められたいという欲求の Positive Face である。しかし、これら Face は脅かされることが多く、この脅かしを FTA(face threatening acts)という。現実のコミュニケーション場面で、なるべくこの FTA を緩和しようとするのが Politeness であり、特に Negative Face を守ろうとするものが Negative Politeness、Positive Face に働きかけるものが Positive Politeness である。これらの Face や FTA はどの言語文化にも普遍的に存在するものと考えられているが、何が FTA になるか、その FTA 緩和のためにどのような言語方略をとるのかはそれぞれの言語文化により異なると考えられている。

この Politeness 理論の枠組の中で、謝罪と感謝の一番の起因となる「恩恵」と「迷惑」を

考えると次のように述べる事ができる。まず、聞き手から「恩恵」を受けるという事は、聞き手が話し手の Positive Face を満たそうとする行為であり、一方、聞き手に「迷惑」をかけるという事は、聞き手の Negative Face を脅かす行為と考えられる。

本稿のデータ結果が示すように、日本語話者が英語話者以上に聞き手への「迷惑」を意識し、その結果「負い目」を感じているという事は、日本語話者が、聞き手の Negative Face への脅かしを非常に重大に受け止め、そのためその脅かしが話し手にとっては「負い目」となり、その結果、聞き手との関係を修復する必要性を感じているということである。逆に、英語話者が聞き手からの「benefit」を意識し「indebtedness」を感じているという事は、聞き手から「benefit」を受ける事で話し手自らの Positive Face が満たされたことを重く受け止め、そのことで聞き手に対して「indebtedness」を感じていると考えられる。また、日本語話者が聞き手から「恩恵」を受けた場合、「嬉しさ」を感じてもそれを「負い目」とは感じないのには、Positive Face を満たす事の重要性が、英語文化とは異なり日本文化では「負い目」と感じられるほど重く受け止められないからだと考えられる。さらに、日本語話者が聞き手に対して「迷惑」と感じる事を英語話者が「迷惑」と感じず、従って「負い目」を感じないのは、英語文化では Negative Face に対する脅かしが日本文化におけるほど重く考えられないからであろう。つまり、同じ場面に際しても、聞き手の Negative Face の脅かしを深刻と取るか、聞き手からの話し手自身の Positive Face の充足に重きを置くかで、その言語文化での「負い目/indebtedness」の感じ方が異なってくると考えられる。

一般に日本文化は Negative Politeness 重視の文化、一方、英語文化は Positive Politeness 重視の文化と考えられている。その具体例は日本語における敬語の使用や、英語に見られる誉めや呼称の多用など、言語のあらゆる側面より唱えられている。これら文化による Politeness の多様性の一面が感謝・謝罪の選択にも現れているといえる。

従来、日本文化は「負い目」を意識する文化としばしば指摘されてきた (Benedict 1946)。そして、そのことで日・英語の謝罪と感謝の使用の相違が説明されがちであった。しかし、謝罪と感謝に関しては、実は必ずしも日本語話者が英語話者以上に「負い目」を感じるとは一概に言えないことが明らかになった。むしろ、英語文化においては、日本文化とは異なるところで、すなわち話し手の Positive Face が満たされることにより「indebtedness」を感じていたと考えられる。むしろ、それぞれの言語文化で何が「負い目/indebtedness」と感じられるかが異なっているがために、その結果、発話行為の選択にも相違が見られると考えるべきであろう。

### 6-3 社会的規範としての謝罪

今回の調査で、場面設定をするにあたり取り上げた3つの変数(聞き手の負担、話し手の責任、話し手の地位)のうち、聞き手の地位と発話行為の選択との関連を考察したい。

同じ場面において、聞き手の地位により話し手の心理が大きく変る事がないことは既に明らかにした(表3)。しかし、日本語においては、話し手の心理が上司に対する場合と同僚に対する場合とで同じであるにもかかわらず、実際に遂行される発話行為が異なる場面が見られた。それは、聞き手に自動販売機のお金を借りる場面3、4である。上司に借りる場合と、同僚に借りる場合とでは日本語話者に心理的な違いは見られず、話し手はともに「嬉しさ」を強く感じている(表4)。しかし、それにもかかわらず、実際に選択される

発話行為は、上司に対して 64 パーセントの被調査者が謝罪するのに対し(併用場面を含む)、同僚に対する謝罪は 28 パーセントにとどまった。このことは、話し手の心理以外の要因が、発話行為の選択の要因になったことを意味する。今回の場合はそれが聞き手の地位であったと考えられる。すなわち、話し手より地位が上の者に対しては心理的要因にかかわりなく謝罪が選択されている。

この様に、必ずしも常に話し手の心理により発話行為が選択されるわけではなく、聞き手の地位によって感謝と謝罪の使い分けが行われている場面が日本語には見られた。ちなみに英語には今回の 8 場面の限りではそのような結果はあらわれなかった。この結果は、話し手の心理と同時に、その社会の規範により発話行為の選択が大きく影響を受けていることを裏付けるものである。先の Politeness の枠組みで考えれば、日本の社会規範では、地位の高い上司に対しては同僚に対する以上に、より入念に negative face への配慮がなされたといえる。このように、Negative Face の脅かしにに対する心配りは、話し手の心理とは別に、ひとつの規範として話し手の中に定着しているようである。しかし、本調査ではこのような例はこの一例しか見られなかったため、これからさらに多くの場面を分析する必要がある。

## 7. まとめ

本調査では、恩恵を受けた場面に焦点を置いての発話行為の選択とその背景心理を分析した。その結果明らかになったことは、確かに従来から言われているように、英語とは異なり、日本語では恩恵をうける場面で感謝とともに謝罪が行われていた。しかし、そこには場面ごとで発話行為の使い分けが見られた。そしてこれらの両言語における発話行為の選択の相違の背景には、両言語での「恩恵」と「迷惑」に関する話し手の判断の異なりが見られた。しかし、両言語でさらに異なるのはそれらの判断の相違だけではなく、それに伴う「負い目/indebtedness」の意識でもあった。日本語話者が聞き手への「迷惑」に対して「負い目」を感じやすい事は従来から指摘を受けてはいたが、本調査では英語話者が「恩恵」を受ける事によって日本語話者が感じる以上に「indebtedness」を感じている事も明らかになった。すなわち、日本語は debt-sensitive な言語と指摘されてきたが、実は英語においても日本語とは異なる側面で聞き手に対する「負い目/indebtedness」を感じている事が指摘できた。さらにその違いは face のどの側面を重視するかという、Politeness の多様性より起因している点を指摘した。

これからは、先に行った聞き手に迷惑をかけた場合の謝罪表現の日・英対照分析(大谷 2002)との関連をより明らかにし、両言語の謝罪の全体像とその特徴の相違を明らかにしてゆくことが必要と考える。

## 謝辞

本調査についてはハワイ大学のかつえ・秋葉・レイノルズ氏、アリゾナ州立大学のシャーロット・コーエン氏にご協力いただいた。ここに記して謝辞を表す。

## 注

1. 謝罪・感謝表現を発する側を「話し手」、謝罪・感謝表現を受ける側を「聞き手」とする。
2. 質問紙は、日本語と英語とでのその内容を統一するため以下の手順で作成した。まず、日本語で作成した質問紙を英語に訳し、その英語の質問紙を英語母語話者に日本語に訳させ、オリジナルの日本語の質問紙と英語から訳した日本語質問紙に内容の差がないことを確認した。
3. 各場面での出現回数が2回以上の表現のみを対象に集計した。又、類似する表現（例：「すみません」「すいません」「ほんとにすまん」「すまん」等）は一つの種類としてまとめて集計した。
4. 1談話の中に同じ表現が繰り返し使用された場合も、その回数を全て数えた。（例：「ありがとう。ほんとにありがとうね。」の場合、「ありがとう」の出現回数を2とした）
5. これら心理要因を表す各用語は、日・英語でその語感が若干異なる事も予想されるため、以下では質問紙で使用した両言語での表記で記す。

## 参考文献

- Austin, J.L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford U.P. 坂本百大訳『言語と行為』大修館書店 1978.
- Benedict, Ruth. 1946. *The Chrysanthemum and the Sword*. Boston: Houghton Mifflin.
- Brown, Penelope and Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge U.P.
- Coulmas, Florian. 1981. "“Poison to Your Soul” Thanks and Apologies Contrastively Viewed." *Conversational Routine: Explorations in Standardized Communication Situations and Prepatterned Speech*. Hague: Mouton.
- Goffman, Erving. 1971. *Relations in Public: Microstudies of the Public Order*. New York: Basic Books.
- Olshain, Elite and Andrew D. Cohen. 1983. "Apology: A Speech-Act Set." *Sociolinguistics and Language Acquisition*. Rowley: Newbury House.
- Searle, John R. 1969. *Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge: Cambridge U.P. 坂本百大・土屋俊訳『言語行為』勁草書房 1986.
- 大谷麻美. 2001. 「謝罪表現の日・英語対照研究：談話における機能を中心に」『日本英語コミュニケーション学会紀要』第10巻 第1号.
- . 2002. 「謝罪慣用表現と謝罪心理：日・英対照研究」『日本英語コミュニケーション学会紀要』第11巻 第1号.
- 熊取谷哲夫. 1988. 「発話行為理論と談話行動から見た日本語の「詫び」と「感謝」」『広島大学教育学部紀要』第2部 第37号.
- . 1994. 「発話行為としての感謝：適切性条件、表現ストラテジー、談話機能」『日本語学』第13巻第7号.
- 三宅和子. 1993. 「感謝の意味で使われる詫び表現の選択メカニズム：Coulmas(1981)の indebtedness 「借り」の概念からの社会言語学的展開」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第8号.
- . 1994a. 「「詫び」以外で使われる詫び表現：その多用化の実態とウチ・ソト・ヨソの関係」『日本語教育』82号.
- . 1994b. 「感謝の対照研究：日英対照研究—文化・社会を反映する言語行動」『日本語学』第13巻第7号.
- 森山卓郎. 1992. 「関係修復のコミュニケーション：現代日本語のお礼とお詫びの定型表現」『藤森ことば論集』大阪：清文堂出版.
- 山梨正明. 1986. 『発話行為』 東京：大修館書店.

## Appendix: 談話完成テストと心理要因テスト

場面2：あなたが職場の自動販売機で珈琲を買おうとしたら、財布をデスクにおいてきたことに気づきました。一緒にいた上司がお金を貸してくれようとしています。あなたはそのお金を借りようと思います。

上司：「はい。後で返してくれればいいよ。」

**あなた：** \_\_\_\_\_

- あなたの行為は上司に迷惑だと思うか。 とても迷惑 5—4—3—2—1 全く迷惑でない
- あなたは自分のしたことを残念に思うか。 とても残念 5—4—3—2—1 全く残念でない
- あなたは責任を感じるか。 とても感じる 5—4—3—2—1 全く感じない
- あなたは上司に負い目を感じるか。 とても感じる 5—4—3—2—1 全く感じない
- あなたは上司に対し気の毒に思うか。 とても気の毒 5—4—3—2—1 全く気の毒でない
- この状況はあなたに恩恵があると思うか。 とてもある 5—4—3—2—1 全く無い
- この状況であなたはうれしく思うか。 とてもうれしい 5—4—3—2—1 全くうれしくない

Situation 2: When you are buying coffee at a vending machine in your office, you notice that you left your purse on your desk. Your boss beside you offers to lend you some money. You borrow the money.

Boss: "Here. Pay me back later."

**YOU:** \_\_\_\_\_

Is your action offensive to your boss?

Very offensive 5—4—3—2—1 Not offensive at all

Do you regret your action?

Very regretful 5—4—3—2—1 Not regretful at all

Do you feel responsible?

Very responsible 5—4—3—2—1 Not responsible at all

Do you feel indebted to your boss?

Very indebted 5—4—3—2—1 Not indebted at all

Do you feel sympathy for your boss?

Very sympathetic 5—4—3—2—1 Not sympathetic at all

Is this situation a benefit to you?

Very beneficial 5—4—3—2—1 Not beneficial at all

Do you feel happy in this situation?

Very happy 5—4—3—2—1 Not happy at all